

蕪村の詩

中 川 澄 子

一 序

蕪村が画家であり、感覚的で清新な中興俳諧の代表的俳人であることは一般によく知られているが、その彼が「北寿老仙をいたむ」「春風馬堤曲」「澗河歌」という三篇の珠玉のような詩を書いていることは意外に知られていないようだ。

現在これら三篇の詩に対して、一部では蕪村の俳諧とは別に、むしろそれよりも高いとさえ思われるような評価がなされているようである。

封建時代という窮屈な社会において、人々が町人社会の経済的向上に伴ない生活外の生活、社会外の社会に、はなやかな享楽生活を求めた中で一般のそういう卑俗の中にだけひたってはられない一種のエリート達は、逆に現実拘泥することなく詩画その他の諸芸に遊び、通俗を嫌って悠悠自適の生活をするいわゆる市隱的文人趣味へと逃避したのであるが、その結果それらの人々による教養的社交界ともいうべき集団のようなものを見ることができるともいえる。

「春風馬堤曲」時代の蕪村もその内の一人であるが、す

でに享楽生活をも風流とみてそれを楽しんでいた事は、高踏なその理念からみれば矛盾であり、書簡の中に画料の催促や生活苦を訴えたものが相当見られる事からも、家庭を持った蕪村には、世路の苦しみが現実としてその生活にあったことがうかがえる。蕪村の俳画の世界は空想上の理想の世界であった。現実の生活が世俗的になればなるほど蕪村は頭の中でより反俗で高踏な世界へ逃避し、そこに自らを遊ばしめてなぐさめたのであろう。

このような矛盾の多い、華やかだがどこか空虚な生活の中で、一人娘くのを嫁がせた安心感も伴って急にたまらなく郷愁を感じ作られたのが「春風馬堤曲」であったようだ。

又「老鶯児」の回想的詠歎からみるとまだ何事にも一途で妥協を許さず、純粋により真実なものを求め、現にそういう生き方をしてきた若き頃「北寿老仙をいたむ」を作ったころの自分自身へのなつかしさがあったのかもしれない。

蕪村の句中花を扱ったものが多いが、ほとんどが桜、梅等いはば古くから詩歌に常用された花がほとんどであって

たんぽぽを扱ったものは一つもない。それなのにこの庶民的な花が、彼の三篇の詩の内二篇に共通して出て来ている。このことは「春風馬堤曲」の蕪村が「北寿老仙をいたむ」の蕪村をなつかしんでいるか又は、たんぽぽが幼き頃の想い出につながるものであつたかに解釈出来まいだらうか。「春風馬堤曲」と「澗河歌」は遠く二十余年前に作られていた「北寿老仙をいたむ」と彼の内面的抒情の強い糸で結ばれていたのである。

そこで三篇の詩―特に「北寿老仙をいたむ」とその周囲を考察することによってその中に俳諧には見出し難い蕪村らしさや、なんらかの形で現われているであろう蕪村の人間性を探求してみたいと思う。

二本論

(一) 蕪村の詩について

蕪村の詩といえは「北寿老仙をいたむ」「春風馬堤曲」「澗河歌」の三篇をさすのが普通である。「老鶯児」の一句を「春風馬堤曲」「澗河歌」と共に三部曲の一つとして考える説もあるが、やはりこれは自由な詩精神の高揚をみた『夜半楽』全体の結語風な一句であるとみて、ここでは省くことにする。

三篇の詩については、その研究が多いだけにそれを総称して自由詩、抒情詩、和詩等々の表現がなされている。又

清水孝之氏は実文に対する俳文と同様の立場から詩も定型非定型を問わず、総称して俳詩というのが最も妥当だとし、支考の仮名詩（ク和詩）を意識的に除外し、それ以外の新体の詩を俳諧詩とか、明治新体詩の先蹤をなすものとかえて俳体詩等というのは適當でないといわれている。

俳体詩と称するには、蕪村の詩が近代的で明治新体詩の初期のものよりむしろ優れているとはいへ、新体詩はあくまで西洋詩の移植影響のもとに生まれたものであつて蕪村の詩と直結した流れを持つものではない。また自由詩と称するのも「旧来の文語、雅語を以つてする無定型の詩は、別に破調の語を以つて呼んで、自由詩の名で呼ばないのを通例とする」^{〔注一〕}のであるからあまり適當とは思えないし抒情詩とする場合「春風馬堤曲」や「澗河歌」のみごとな変身は、抒情詩の一語で片づけてよいものかどうか疑問である。

しかしそうかといって俳詩として総称するのが適當かどうかについては、蕪村の詩が仮名詩と区別されるものか否かがポイントにならう。いづれにしても彼の詩が当時どのような流れの中に生れたかというのが大きな問題となる。

それについて顯原退蔵氏は著書「蕪村」の中で「春風馬堤曲の源流」と題して入念な研究をされている。それを要約すると、支考一派の仮名詩は形式技巧にとらわれたもので、いかに俳諧に仮名詩一派がながく伝つたにしても、そ

のようなものが孤高な蕪村の詩情を動かすこともなかったであろう。しかし彼の詩は純粹に彼の創案によるものではなく、素堂、嵐雪を源とし、楼川、尾谷、文喬等を主流とする仮名詩とは別の新詩運動の中に見出すことができるというのである。

〔注二〕

この説に対して清水孝之氏は「北寿老仙をいたむの源流」において、蕪村が仮名詩に批判的であつたろうことは推察に難くないが江戸座の宗匠連の間ではそれが受け入れられ試作されていた。楼川らの作品も結局は概して仮名詩圈内のもので、多少近世歌謡調の導入がみられるにすぎない、と反論されている。

つまり頼原氏は、仮名詩とは別の新詩運動の存在をいわれ、清水氏はそれを否定して、はっきり区別出来るものではないといわれている。このちがいは楼川らの詩と歌謡との關係に於いて頼原氏は「この間から河東節の作者が出たりしているのも、あるいはそうした曲詞にまで俳諧文章の進出を意味するものであつたかもしれない」というように解釈していられ、清水氏の近世歌謡調の導入という解釈とかなり喰ひ違つてゐることにある。

そこで両氏の説を検討してみると、楼川ら茶話稿の一派が近世歌謡に親しんだことは、洞房語園にのる「袴着の小謡」「髪置の小うたひ」等からも明らかで、又端歌の冒頭に盛んに俳句が利用されている事は江戸座宗匠連中が近世

歌謡の作詞者であつたことを想像させるし、後年の名女形で絶大な人気があつた瀬川茶之丞が路考という俳号を持つていて「路考風」と呼ばれる風俗を流行させた事からも遊蕩的環境と俳諧的環境が無縁でなかつたことがいえるようう。

〔注三〕

以上から考えられることは、楼川の「立君の詞」に類するものがかなり歌謡に近い、というよりどちらかといえば歌謡の部類に属するのではないかということである。つまり頼原氏のあげられた一連の詩は、仮名詩に刺激され自由な詩形を手段とし、この時代特有ともいふべき市隱的文人趣味的性格の上に各々の個性ある新しい抒情を歌謡調にうたつたものといえよう。従つて仮名詩と全く区別することも俳詩という名でひとまとめにすることも、共に少々無理があるように思う。これららの詩が「俳諧精神を生かした詩」というような統一的な意識のもとに作られていれば、この種のものだけで立派に近世文芸中の一分野を占めることが出来ていたかもしれない。

むろん蕪村の詩についても同様のことがいえる訳で、この種のもものが僅かに三篇しか知られていないということは、一つの蕪村の詩に対する態度の表れとみることができよう。

(一) 「北寿老仙をいたむ」について

この詩は結城を根城とする十年にわたる「懷疑的遊歴」

時代、蕪村三十才の時のもので彼の良き理解者であり援助者であった北寿老仙こと早見晋我の死をいたんで作られたものである。晋我没後五十年、その子桃彦が父の五十回忌に際して晋我を襲号した記念に出版した『いそのはな』に「庫のうちより見出つるままに右にしるし侍る」と末尾に記されて発表された。蕪村も没して十年後のことである。つまり発表意欲の強かった作とは考えられない。

この詩の清新さや近代性についてはすでに定評があるがこの詩を生んだ環境は当時蕪村にとっては師宗阿没後俗化した俳諧に対して著しく懐疑的になり、同門の親友、下総結城の砂岡雁宕のもとに身を寄せ、ここを根城に奥羽への苦しい旅など歴行十年の生活を始めその中で画業と俳業の基礎をかためていった時代である。このような人間の苦悩の時代、結城の俳系をともした人々の暖かい雰囲気は蕪村にとっては何にもかえがたいものであり、それだけに師宗阿につづく晋我の死がいかに彼を悲しませたかがわかる。その悲しみが格調高い旋律で表現されているところにこの詩の美しさがあるといえよう。

1. 解釈の問題

この詩の解釈についてはまだ定説をみない部分が残されている。第一の問題点は作詩の時点についてである。従来は第七行の「ひた鳴きに鳴を聞ば」と第十三行の「ほろるともなかなぬ」の解釈上の矛盾をなくす為第十一行までを

北寿老仙が死んだ夕方、第十二行以下を初七日あたりのことというようにとつてあるが、この美しい流れを持つ詩にこのような切れめをつけるのは無理があるように思われる。

これに対して今井文男氏はリフレインの形式に着目して、この詩の構成は段落にこだわらずにみてみると単なるくりかえしでなく、くり返しによってそれで押しはさまれる部分を包みこむ形式、つまり佐藤春夫の「秋刀魚の歌」のように近代詩の発見した手法と同じだとされ「第一に岡の辺に住む雉子の鳴き声を聞けば、その友の雉子もそれに答えてほろると鳴きかわす風景があり、第二に雉子の鳴き声で友を思い、その友のすでに亡きことを思いおこし、雉子が鳴きかわすようにはその友は答えてくれぬという事柄があり、その第一と第二を重ね合せたもの」として解釈されている。

今井氏のリフレインのあつかいは大変おもしろい私もこの説に賛成したい。ただ現にひた鳴きに鳴いている雉子の声を聞きながら友は何も答えてくれないという意味をほろるとも鳴かぬと表現するだろうか？私はこの日雉子は鳴いていなかったととりたいたい。従来は十七行の「雉子のあるか」のかを詠嘆の終助詞として解釈してあるが、これを疑問を表す係助詞とみたらどうであろうか。この二つの助詞は全く接続においても又文末に表れる点についても文法上

全く区別し難い。又この岡は二人にとって日頃親みの深い岡であり雉子も又想い出ある鳥ではなかったろうか。そこで私はこの一行を次のように解釈したい。「この岡にはよく二人でやって来ていた。よく耳にしていた雉子あの雉子は今日はいるのだろうか。ひた鳴に鳴いている声はちやうど友が親子を呼び合っているようでした」と。こう解釈すれば八・十二・十三行も「私にも河をへだてて住んでいる友、あなたがいました。しかし今日はどういふ訳か雉子がちっとも鳴かないように、もうあなたは私に何も答えてはくれないのですね」とつづいて解釈上の矛盾は無くなるのである。

次に第二の問題点は、へげのけぶりのへげについてである。これには諸説がある。

一、変化の煙。つまり火葬の煙〔注五〕。竈の古語。葬祭用のへぎ板製品を焼き捨てる場所。〔注六〕三、付け木。現代のマッチのようなもので偶然その夕方眺めた野火であらう。〔注七〕

以上三つが代表的なものであるが、問題となるのはこの詩によまれた場所が実地に即したものであるということだ。西から東へ流れている小川をへだてて対岸は竹藪のある丘陵地帯で、今でも木かげに昔の土族屋敷が数軒のこっているそうである。又冬から早春にかけてこの辺は西風が〔注八〕激しいという。これから考えると煙を見たのは岡の上であ

らうし、火葬場や葬祭用品を焼き捨てるところが土族屋敷の近くにあったとも思えない。又野火だとへげのけぶりとはいわないだろう。以上から時間が夕暮どきであることを考えて、へげをかまどの古語とみて夕餉の煙とするのが妥当ではないかと考える。その煙がいつになく蕪村に無常を感じさせたのである。

2. 陶淵明の影響について

この詩には晋の陶淵明の「帰園田居」其四の影響があるといわれている。たしかに冒頭の「何ぞはるかなる」は漢詩的表現である。この頃の町人社会における漢詩の流行は史上空前の現象ともいふべきもので、蕪村とて早くから漢詩に親しんでいただろう。そして中でも陶淵明には深く影響されていたらしい。陶淵明の詩をよんでいると俗世間を嫌ったり真実の生活を求めての隠遁等いかにも当時の青年蕪村と近いものが感じられる。

「帰園田居」五首と時を同じくして作られたのが陶淵明の代表作といわれる「帰去来辞」で、その序によれば、貧しきが故に県知事になったが世俗にむかない自分のこと、考えてみればこのようなことは生活の為にわが身をくるしめるだけのものであった。そこでこの矛盾多い生活に自分は自身の本心にむかって恥じ、妹が死んだのをきっかけにのぞから辞職した。というような意味のことが書いてある。成立事情といい「少きより俗に適わん韻無」「性として本

と丘とを愛せしに」という陶淵明の思想、性格といい、十年近い江戸生活に「俗に適ふ韻なき」ことを自覚し、師宗阿が没したのを機に江戸を去り結城にむかった蕪村の事情と種々の面で全く相通するものがある。従つて「帰園田居」が当時蕪村の愛好する詩であつたろうことは想像に難くない。しかし「帰園田居」其四の内容は久しぶり山沢に散歩し、新鮮で楽しい感動の中にふと発見した人生の幻化を表したものであつて、悲しみの懐いをいだいて醒に上つた北寿老仙の詩とはかなり発想が違ふ。内面的思想的にはその影響を明らかに見出すことが出来るが、北寿老仙の詩はこの詩がヒントになつたり巧妙に換骨胴胎されたものであると取るのは少し行き過ぎではないかと思う。俳句には表現しつくせない感情の激流がこの詩を作らせたもので、その内容に影響がみえるのは陶淵明の思想的影響を受けているからに外ならない。第一影響があると思われるのは九、十、十一の三行に於いてのみである。強いていえば「北寿老仙をいたむ」は「帰園田居」其四の影響がみられるというより、それをも含めて陶淵明の影響がかなり著しく表れている作品であるといふべきであらう。

3. 構成について

この詩は八連の構成をとっており全体的には一、二行と十四、十五行及八行と十二行の二つのリフレーンによつて二重に包みこまれている。更によく読んでみると

一、第一、第三行の君の頭韻が、第八、第十二行の友をはさんで第十四行と呼応している。

一、第四、六、八、十一行と最後の十八行にある脚韻のき

が呼応している。

がわかり、そしてこの韻が詩全体に軽い緊張を与え、ましまりのあるものとしている。又九、十、十一行と十六、十七、十八行とは、共に宗教的色彩を与えて詩に起伏を作り巧妙に構成されている。このようなみごとな構成の上に悲しみに耐え切れず、二人してよく来た岡へ来て、そこに咲く花によつて亡友との想い出により悲しみを増し、雉子によせて二人の友情を思いかえし、更にはげしく高まつた悲しみをふと目にはいった煙のはかなさによつて世の無常を思い心の静けさ（あきらめのようなもの）をとりもどし、それに支えられてより重く沈んだ悲愁の中に友を想い、夕暮から夜へと時間の移行と共に更に深く悲しみは沈んでゆきついに浄土に平靜へと落着くまでの複雑な抒情の流れをすっきりとのせているのである。韻をふんでいる事は、支考の仮名詩の影響を想い出させるが、リフレーンによつて二重に包まれた形式や、破調ながら流れるような自然な詩句に抒情の変化過程をのせる等、全く近代詩に優るとも劣らないといえよう。

このように見てくると、この「北寿老仙をいたむ」の一篇は同時代の他の多くの詩にくらべてあらゆる面において

はるかに卓絶した作品であるということが出来よう。詩に對してそれほど情熱を持たなかったのか、あるいは支考の仮名詩に反撥する為に試作することを嫌ったのか、理由は定かでないが、いずれにしてもこれだけの才能を持つ蕪村のこの種の詩がこれのみで終ったことは非常に残念なことである。

三 結論

蕪村の詩はその構成のすばらしさや、字句、着想の清新で無駄のない点等、近代詩にも匹敵すると称讃されるにふさわしいものである。それは彼が俳諧に對するような真剣な本職意識がなかった為に、かえって自由に伸び伸びと自然な形で表現することが出来、その為に「北寿老仙をいたむ」においては老友を亡つての切実な悲嘆が、「春風馬堤曲」においては懐旧のやるかたなきよりうめき出たる実情がこの詩の流れからくる息づかいと共に感じられ、近代人の共鳴を得るものとなったのかもしれない。

俳、画を通して現在まで種々の蕪村の人間性について語られているが、これらの詩の中にこそ蕪村の最も人間的な面がうかがえるのではないだろうか。「北寿老仙をいたむ」の格調高い清新な味こそ蕪村の真の持ち味のような気がする。この詩に触れることによって、はじめて人間蕪村を本当に身近かに感じ得たような気がする。

単にこの詩を賞讃するのみでなく、これらの詩を手がかりにして、もっと人間蕪村に親しく触れることにより、彼の俳句の中にも又更に深く新しいかがやきを見出すことが出来るのではないかと思うのである。

〔注一〕「日本文学大辭典」自由詩の項より

〔注二〕「解釈と鑑賞」三十五年四月号

〔注三〕「江戸時代」北島正元著 新潮支庫

〔注四〕「国学」三十九年一月号

〔注五〕日本古典文学大系「蕪村・一茶集」暉峻康隆校注

〔注六〕「与謝蕪村集」朝日新聞社

日本古典鑑賞講座「蕪村・一茶」角川書店

〔注七〕「国文学」三十九年一月号

〔注八〕日本古典鑑賞講座「蕪村・一茶」四十二頁